

---

# 逃亡

高田那美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

逃亡

### 【Nコード】

N5618A

### 【作者名】

高田那美

### 【あらすじ】

私は帰ってきた。忌まわしい記憶と暖かな思い出が残る町へと、一通の手紙を抱いて。手紙の差出人は、かつて愛した人の息子だった。

電車が走り去り、ホームには数匹の鳩と私だけが取り残された。

ふらつきながらも私は青いプラスチックのベンチにたどり着き、うなだれ掛かるように座り込んだ。夏の日差しは容赦なく照りつけ、私の肌の表面を汗で濡らした。電車の中はクールビズなどどこ吹く風、まるでそれ自体が巨大な冷凍庫になったかのように冷却されていて、私は数分前まで冷凍食品にでもなったかのような気分だったのに、いまはヒーターのように全身が熱を発していた。

次の電車が来るまで十分ほどあった。ローカル線の田舎駅は往々にして乗り換えが不便だ。轟々と音を立てて眼前を特急列車が風と共に駆け抜けていった。これからはしばらくは、通り過ぎる電車も停車する電車もない。

私は思い出したかのようにホームを見渡した。典型的な田舎の駅の風景が、そこには広がっていた。二台の自販機と四脚一組のプラスチックの椅子が五セット。アルミ製の掲示板には日焼けした時刻表が何の主張も持たずに張り付けられていた。

何も変わっていなかった。いや、変わるべき箇所は変わっているのだろう。なにしろ私がこの駅を訪れたのは実に十五年ぶりなのだ。老朽化は進み、消耗品や自販機の中身なんかは幾度となく取り換えられているはずだ。しかしそんな瑣末な変化では、この駅が持っている雰囲気は変えられない。それは私が年を取り、感傷深くなっているからではない。この駅自体 否、むしろこの駅を有するこの町全体がまるで一匹の巨大な生物のようだ。細胞は日々死んでいつているが、生物自体は生き長らえ続ける。

十五年前、十八歳だった私がこの町を去ったときも、一つの細胞が死んだ。その細胞の名前は三河桃子。色素が薄く、日に当たるときらきらと光る栗色の髪とこの辺りで降る廃棄ガスに汚染されて灰

色をした雪とは違い、どこか異国に降る雪のような白い肌をした、薄茶の瞳で私の顔を覗き込んでケタケタと笑っていた少女。どこにでもいる十六歳の少女だった一人きりの桃子は、私が電車に乗る三分前に線路に飛び込み、その若い命を散らした。私は彼女の血が染み込んだ線路の上を滑る電車で、町と彼女から逃げ出したのだ。

私はこの町に対して暗い感情しか持っていない。生まれ、育ち、青春と呼ばれる時間をこの町で過ごしたが、過ごしたからこそ、はつきりと言おう。私は生まれてから十八年間をこの町に、この生物に『食い壊された』。

それは田舎に生まれた者につきまとうありきたりな劣等感、都会への憧れと自分が生まれた場所に対する苛立ち、なんかではなく、ひとえに桃子の存在が私を食い潰していたからだ。私が過去を思うとき、そこには常に桃子の影がちらつき、過ぎ去った時の真の姿を覆いつくしていた。愛しい存在と共に思い出される過去は、私の本来の感覚を狂わせる。忌むべき場所を慕情溢れる故郷へ、吐き気を催す感情を穏やかな郷愁へと変化させる。

だから私はここへ戻ってきたのだ。うすぎたない故郷の本来の姿を思い出すために。

私は地面に置いていた小ぶりの旅行鞆を取り上げ、膝の上に置いた。少し迷ってから、中から一つの封筒を取り出し、膝の上に置いた。どこにでも売っているありきたりな白い封筒。表面には綺麗な、しかしどこか初々しい文字で私の名前と住所が書かれている。差出人は書かれていない。しかし、思い当たる人物が一人居る。

「時間通り、ですね。相変わらず」

顔を上げると、私の目の前に一人の青年が立っていた。短く刈られた黒い髪と日に焼けて浅黒くなった肌とで印象は真逆だが、細められた目の奥の薄茶色の瞳が彼女との繋がりを表していた。

「この手紙を出したのは君か」

ひらひらと封筒を振ると彼は薄く微笑んだ。

彼の名前は三河賢二。桃子の弟で、恐らく私のことを殺したいほどに憎んでいるであろう人物だ。

「本当に来るとは思ってませんでした。あなたは臆病だから」

「その通り。私は臆病だ。だから早く話を終わらせよう」

私は立ち上がり、彼の前へと一步を踏み出した。それは桃子の死と共に置いてきた過去へ歩み寄ることと同意だった。賢二は右手を私に突き出し、握っていた物を見せた。小さな桐の箱。

その箱が存在していることに私は言葉を失った。震える瞳で賢二を見ると、彼は恐ろしいほどに無表情で私を見つめていた。

「……………どこで、これを？」

「姉の　いえ、母さんの箆笥の中です」

私は思わず箱に手を伸ばした。しかしその手は彼の左手で払われ、鋭い痛みをもたらしただけだった。

「薄汚い手で触るな！　これは俺の物でおまえの物じゃないんだ！」  
私の行いに激高し、声を荒立てる彼を後目に、私は事実には怯えていた。私の記憶に暗い影と暖かな幻影を創る事実　私が十五年前に犯したたった一つの罪。その証拠が、その箱の中に収められている筈だ。

桃子が私の子をはらみ、男児を　賢二を産み落としたということが。

「私を呼んだのは、これを見せるためか？」

私はあえて分かりきっていたことを聞いた。そんな筈はないのだ。彼は私と桃子の子供なのだから。

落ち着きを取り戻した彼は、酷く冷たい声で答えた。

「いいえ。あなたを殺すためです」

過去　私が若く、桃子が幼かった頃。我々は過ちを犯した。今でもその瞬間の記憶はもやがかっていて、はつきりしない。私の中で唯一その時間だけがぼっかりと抜け落ちているのだ。覚えているのは、私が自分の部屋に桃子を招き入れたところまで。そこから

私の脳髄は一気に事後へと繋がるのだ。桃子の白い肌。桃子の黒い髪。桃子の赤い唇。そして桃子の涙。

私が彼女に対して行ったのは手酷い裏切り以外の何者でもない。しかし若く、分別のつかなかった未熟な私は、それが愛の証拠であると誤っていたのだ。だから彼女が逆上し怒りを露わにした時も、訳が分からずただなだめようと必死になっただけだった。

それより、私と桃子の関係はがらりと変わった。我々は町の外れにある大きな家。明治時代に立てられたそれは、むしろ館と書いていいほどの大きさだった。に住んでいた。母屋は広い林に四方を囲まれ、門から玄関までは百メートルほど、鬱蒼と繁る白樺の群れの間を歩かねばならなかった。離れは母屋から遠く離れ、林の中にぼつねんと建っていた。私と桃子は幼い頃は林の中で鬼ごっこをし、離れで隠れんぼをして遊んでいた。我々にとって離れは一級の遊び場であり、共有している秘密基地だった。

しかし、私の裏切りの後、離れは桃子の療養所となった。それはむしろ、ヒステリックに当り散らす桃子の隔離部屋と言った方が良いかもしれない。桃子は変わってしまった。狂ったように女中や料理人を殴りつけ、泣き叫び、刃物を持ち出しては喉を切りつけ死のうとした。私は怯え、桃子を徹底的に避けて過ごすようになった。私の目には、桃子は何か恐ろしい化け物のように映ったのだ。私が愛した桃子は、もうそこには居なかった。

離れに移ってから、桃子は急激におとなしくなった。それでも泣き叫ぶ声が夜な夜な響き、私の鼓膜に染み込んで離れなかった。周囲の人間と桃子の関係は徐々に回復していったが、最後まで私は彼女と接することを拒絶したままだった。

一年が経ったが桃子は離れに移ったままだった。そうこうしている内に、私は進学のために故郷を離れることとなった。周囲の反対を押し切り望まれぬ勉強に励むことを決意したのは、進むべき道を見つけたからではなく、偏に桃子から逃げ出したかっただけなのだ。桃子の居る家から、桃子の居る町から逃げ出したかった。私の精神

は極限まで追い詰められていた。どこに行っても、桃子の声に囚われていたような錯覚に陥り、町全体が桃子の精神に乗っ取られ私を食い殺そうとしているという妄想が頭から離れなかった。

だからこそ、私が東京へと出発する日に桃子が眼前に現れた時、私は驚愕する以上に恐怖した。彼女の口から出る言葉を恐れた。

「ねえ、裕ちゃん。本当に東京へ行ってしまおうの？」

穏やかな微笑みをたたえた桃子は、以前の、私が知っている桃子と同じだった。しかし私は知っていたのだ。彼女はもう変わってしまったている。どうしようも無いほどに。

「ああ 止めようとしても、もう手遅れだ」

私は務めて平静を装い、感情をにじませぬように単調に答えた。もしかしたら私が抱いている恐怖はただの杞憂で、桃子は何も変わってはいなくて、私が成長しただけなのかもしれない。そんな淡い期待を、無意味な希望を抱いていなかったといえは嘘になる。愚かな私は最後の最後まで、我が身の保身ばかりを考えていた。しかし、そんな私の脆弱な精神は、桃子の言葉によって粉々に打ち砕かれた。

「そんなことはないわ。私は裕ちゃんが何処へも行かない魔法の言葉を知っているもの」

「へえ それはなんだい？」

私の言葉に、桃子は笑った。その笑顔は今でも私の胸に刻まれている。最上の恐怖と共に。

健全な、いたいけな少女の笑みではなく、あれは気狂いの笑みだ。いつもより赤みを帯びた、まるで血のような色をした唇。何もかもを吸い込む暗黒のような色をした髪。病的なほどに青白い、生気を感ぜさせない肌。私が愛していた桃子の全てが、私を恐怖へと陥れるものへと変貌していた。そして私は悟った。桃子はもう何処にもいないのだ。目の前にいるのは、紛れもない、ただの化け物だと。

恐怖にひきつる私の耳に、最も恐れていた言葉が流れた。

「私、裕ちゃんの赤ちゃんを生んだのよ。ねえ　祐一郎お兄ちゃん」

私は桃子を線路へと突き飛ばしていた。幸い、目撃者は誰も居なかった。線路の上に落ち頭から血を流しても、桃子は生きていた。狂気にまみれた声を上げ、壊れた人形のように笑っていた。

「これで裕ちゃんは私を捨てない！　これで裕ちゃんは私から逃げられない！　これで裕ちゃんは私の物！」

笑いながら、桃子は懐から一本の短刀を取り出した。柄から抜くと、きらめく刃を喉元へと押し付けた。

一瞬だけだが、桃子の顔から笑みが消え、泣きそうな顔をした。

その顔は、私が愛した桃子の顔にほかならなかった。

「これで裕ちゃんは、私を忘れない」

私の視界が鮮血で染まった。記憶はここから飛躍して、気がついたときには私は東京行きの汽車に揺られていた。あれから桃子がどうなったのかは分からない。出血の量を考えれば生きてはいられないだろう。しかし、確認することが出来なかった。私は怯えたまま上京し、今日までを過ごしてきた。桃子の言葉は正しかった。私の頭から桃子のことが消えたことはなく、私の心を桃子が放したことはなかった。私は桃子に囚われたのだ。

「あなたが母を殺したんだ」

遙か高みから、賢二が　息子が叫ぶ。線路に突き落とされ、頭を強打し血を流す私の耳には、その声はひどく靄がかって聞こえた。「桃子は自殺したんだ」

私は弱々しく反論したが、その声は笑ってしまふほど白々しかった。私は桃子の姿を思い描く。しかし今まで鮮明に脳裏に張り付いていた像は輪郭がぼやけ、気を抜けば今にも消え去ってしまいそうな危うさを持つてしか現れなかった。

呪縛が消えかかっているのだ。この町に戻り、自分が置いて来た

過去と対面することで、桃子の呪いは効力を失いつつあるのだ。

それが意味することを私は知っていた。

「結果がどうであれ、原因はあなたが作った。僕を産んだのはあなただ。母を汚し、醜い精液を注ぎこみ、近親双姦の罪子をはらませた悪魔は お前だ」

怒りによつてか、賢二の声は低くかすれていた。混濁する私の脳髄には、その声は桃子の声と同じに聞こえた。波紋が広がるかのようになり、声がハウリングする。

「お前を殺す。母の敵は僕が討つ」

波状する声は、私に何の恐怖も呼ばなかった。むしろ 私は喜んだ。

「私を殺してくれるのか？ 死は私にとっては救いでしかないぞ？

桃子の呪いから解かれ、桃子の傍に行けるのか？」

軽佻浮薄な私の言葉で怒りが臨界点に達したのか、賢二の顔から血の気が引いていった。わななく青白い顔が桃子と重なり、私は思わず手を伸ばそうとした。しかし死へと向かいつつある体は重く、手は僅かに動いただけだった。

自分の命が終わるのだという事実をまざまざと見せつけられ、私は愉快になった。もう後数分もすれば、私の意識は遠のき二度と戻らないだろう。そして私は桃子の呪縛から放たれ、桃子自身の傍に行けるのだ。醜く凄惨な過去の虚像ではなく、美しく温かな桃子の元へ。

「お前が母の元へなんて行けるものか！ 悪魔め、お前の行き先は地獄だ！」

「行けるさ。何しろ桃子はずっと私を欲しがっていたからな。肉体を捨てた私達なら、今度こそ幸せになれるだろう。それに地獄？ はっ！ 生きながらに地獄を見続けた私が、今更何を恐れるというんだ？」

笑いが心から込み上げる。本当に愉快だ。こんな喜びの中で死ぬのなら、悪くはない。

「そもそもお前はなんで今更復讐なんかを企てたんだ？」

一つの可能性に思い当たり、私は再び口を開いた。舌はまだ自由に動いた。

「……真実を知ったからだ」

「違うな」

賢二の体が傍目にも分かるほどに震えだした。殺人を犯すことへの恐怖か、醜い真実を暴かれる恐れかは分からなかった。あるいは、その両方か。

「お前は桃子を　自分の母親を愛したんだろう？　母親に対するそれではなく、私が桃子に抱いたのと同類の感情を」

風が私と賢二の間に吹いた。めまいがするような熱気を連れ去り、僅かな清涼が訪れた。私の体は冷え、賢二の体は熱を持っている。しかし私の心は熱く燃え、賢二の心は冷たく固まっていた。

「写真で見た桃子は美しかったか？　母親が自分と生きることを選ばずに、男の心に残ることを知ったときの気分はどうだ？　断言してやろう。お前は私に嫉妬しているだけだ」

「　黙れ！」

青白かった賢二の顔に見る見る間に真っ赤に染まった。浅黒い地肌と相まり、さながら地獄の鬼のようであった。

しかし賢二が鬼ならば、果たして一体私はなんなのだろう？

妹を愛し、妹と交わり、妹をはらませ、妹を死へと追いやった私は一体なんなのだろうか。

私を知っていることは一つだけだ。私もまたこの町の細胞の一つでしかないのだ。私の苦悩も桃子の憂鬱も賢二の屈折も、結局は町が生き長らえるための循環の一つでしかない。ホームから私を見下ろす賢二の屈折は若き日の私の屈折であり、線路で賢二を見上げる私の苦悩は明日の賢二の苦悩である。循環から逃れるためには、桃子のように死を選ばねばならぬ。今まで私はそれが出来なかった

桃子が許さなかったが、今日、賢二によって私の命は絶たれる。

賢二が私を殺すということは、桃子が私を殺すということだ。桃子

が私を殺すということは、桃子が私を許すということだ。桃子が私を許すということは、賢二が私を許すということだ。

あの日、桃子は自分の首ではなく、私の首を切るべきだったのだ。しかし、私を許していなかった桃子はそれをしなかった。だが、ようやく私は許される。呪いは祝福となり、私は桃子の傍へと行く。

桃子の死が私を呪ったように、私の死もまた、賢二にとっては呪いとなるのだろう。しかし、私は賢二を許している。だから賢二はいつでも許されるのだ。明日にでも賢二はこのホームに飛び込むだろう。自分が許されていることに気付き、また許していることに気付くだろう。そうすれば私達の循環は終わり、この生きる町から逃げ出すことに成功するのだ。そのために私は戻ってきた。許されるために。許すために。逃げるために。逃がすために。

霞む視界の中で賢二が何かをわめいているが、その声は私へと届かない。背中から僅かな振動が伝わり、電車が近づいていることを知る。恐怖はない。私はゆっくり目を瞑る。賢二、しばしの別れだ。桃子、今からそっちへ行くよ。

強い風が吹いたような気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5618a/>

---

逃亡

2010年10月8日15時08分発行